



藤 直 織 物

昭和の初めの広沢地区は織物業者が480戸を数え、織物従事者は2000人を超える機業地として発展した。飯塚春太郎や藤生佐吉郎、彦部駒雄ら桐生織物史を彩る先覚者を輩出し、桐生織物の発展を支えた重要な地域である。現在でも30棟を超えるノコギリ屋根工場が残り、藤直織物もそのひとつである。

現役で稼働している3連のノコギリ屋根工場は昭和31年に建てられたもの。

6代目となる藤生敏夫氏は、昭和50年(1975)に家業を継ぎ、現在は、打ち掛け生地(白無垢)帯(掛下帯、丸帯、夏帯)などを主に生産している。

敷地内には住居、工場、寄宿舍、蔵などが当時の面影のまま残る。特に住居は築180年の歴史を持ち、趣のある庭とともに有力機屋の風格を今に伝えている。また、住居と蔵の入口が直結しているのも大きな特徴である。



昭和50年頃は、沼田や茨城、福島などから30人以上の女工さんが集まり、寄宿舍に住み込んで働いていた。

織都桐生の歴史が存分に残る建造物群と、今なお響くノコギリ屋根の機音が当時の息吹を感じさせる。

所在地 桐生市広沢町5-1175
所有者 藤生 敏夫